



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3989 号 2017.11.1 発行

ウインナー、ハムじっくり熟成 北見の障害者施設、歳暮向け製造



北海道新聞 2017年10月31日
手作業で丁寧に作られるウインナー（大石祐希撮影）
北見市内の社会福祉法人・川東の里が運営する障害者就労支援事業所「フレンズ」（川東226）で、歳暮用のウインナーやハムなどの製造が30日、始まった。20～60代の通所者20人が、安心・安全にこだわり、丁寧に加工している。

歳暮用セットは3500円～6千円の5種類で、今年は生ハムスライスのセットを4年ぶりに復活した。担当者は「数が限られるので早めに注文を」と話している。発送日は1月18日、12月2、16日の計3回。道内1万円以上、道外2万円以上の購入につき1カ所への送料無料。注文はフレンズ（電）0157・22・6395へ。

麻生養護の体育館 交流拠点に 放課後や土、日曜を地域に開放



東京新聞 2017年11月1日
バドミントンなどを楽しむ麻生スマイルクラブの利用者ら＝麻生区で（麻生スマイルクラブ提供）

川崎市麻生区の県立麻生養護学校の体育館が、スポーツを核とする地域交流拠点となるよう、住民や障害者らに開放されている。放課後などに、障害のある人もない人も一緒にスポーツなどを楽しむことで、障害者への理解促進や、障害者スポーツの普及を図るのが狙い。（山本哲正）

県と県教育委員会、NPO法人高津総合型スポ

ーツクラブSELFの協働事業。

県は地域の課題に取り組む事業を進めており、同校体育館が今月から本格的に開放されることになった。

この交流拠点「麻生スマイルクラブ」は、麻生養護学校の都合に合わせて、平日の放課後や土、日曜の主に午前で開催される。健常者や身障者が、バドミントンや卓球、パラリンピック競技のボッチャなどのスポーツを楽しむことができる。

事務局のSELFによると、麻生スマイルクラブは受益者負担で運営されるという。SELFの担当者は「有料だが、初回は無料。スポーツを一緒に楽しみながら障害者と交流できるので、気軽に立ち寄ってほしい」と話している。チケットは中学生以下と七十歳以上、障害者は一回三百円、一般は五百円。

県など事業主体は、今後三年かけて運営のモデルをつくり、他校にも広げたいという。
問い合わせは、平日の午後三時から同八時ごろまで、麻生スマイルクラブ＝電080（4677）2509＝へ。

楽天、磐田に野菜工場 18年度内稼働想定、障害者雇用を推進

静岡新聞 2017年11月1日



野菜工場の建設候補地

ネット通販大手楽天（東京都）の子会社が磐田市で「人工光型」の野菜工場建設を計画していることが31日、関係者への取材で分かった。同社の農業事業の進出は首都圏以外では初。管理者を除き、10人ほどを見込む従業員は全て、障害者を雇用する。県内では地元企業や障害者福祉事業所の農業参入が進んでいるが、障害者を多く雇用する県外企業の野菜工場誘致は先駆的という。

同市に集積する農業事業会社と連携し、栽培した野菜の全国流通を目指す。楽天の特例子会社楽天ソシオビジネスが、自動制御の完全密閉施設でレタスなどを育てる。2018年度内の稼働を想定する。既に稼働している都内の野菜工場を上回る生産量を見込む。

建設候補地は同市高見丘の東名高速道遠州豊田パーキングエリア（PA）南側で、工場1棟と駐車場を含めた敷地面積は約4千平方メートルを予定。同社は交通利便性や近年の農業経営体の集積状況を踏まえ、同市への進出を決めたとみられる。

同社広報は「あくまで計画段階で詳細は調整中」としている。

人工光型野菜工場は露地生産や太陽光型の野菜工場と比べ、軽労働で生産性が安定し、障害者の常用雇用につながりやすいという。磐田市ではこれまでにヤマハ発動機が特例子会社を設置して障害者雇用を進めていて、今回の誘致で地域企業の法定雇用率確保への波及効果も期待される。

明石・大蔵市場火災 広がる支援の輪、各地で募金

神戸新聞 2017年10月31日

被災者を支援する義援金募金箱＝明石市貴崎1

兵庫県明石市大蔵中町の商店街「大蔵市場」で発生した火災被災者の生活再建に向け、社会福祉法人や学校の生徒会が義援金を募るなど、市内各地で支援の輪が広がっている。

同市社会福祉法人連絡協議会は、特別養護老人ホームや障害者支援施設、児童福祉施設、保育園など48カ所に募金箱を設置。30日まで、被災者や近隣住民らの生活再建に活用するため、義援金を募る。1日午後5時半～6時半は、明石駅周辺でメンバーが街頭募金を行う。協議会の小松達也会長は「少しでも生活再建の一助となれるよう頑張りたい」と話している。

協議会は、明石市内を拠点に介護や児童福祉、障害者らを支援する社会福祉法人29団体で今年5月に設立。7月の九州北部の豪雨でも、被災地への支援を目指し募金箱を設置した。

大蔵中学校では、生徒会の発案で1、2、6～8日の5日間、校門に立つ登校時のあいさつ運動の中で、募金を実施。大蔵市場は同校の校区にあり、生徒から「地域の役に立ちたい」との声が上がったという。

花園小学校区の市民グループ「ボランティアはなぞの」も10月30日、西明石駅前



義援金を募った。(藤井伸哉)

ひきこもり、協力し解決目指す 大津市が総合相談窓口 中日新聞 2017年11月1日

相談員を務める八田さん＝大津市社会福祉協議会で



仕事に就かず、ほとんど外出もなく周囲との交流がない「ひきこもり」など、支援を求める若い世代のための相談窓口が大津市に新たに開設された。縦割りになっている国の制度の隙間を埋め、「どこに相談すれば良いか分からない」という声に応える。

大津市は十月一日、市社会福祉協議会(浜大津)に「子ども・若者総合相談窓口」を開いた。社会福祉士などの相談員が二人態勢で対応。十五歳以上を対象に本人や家族からの相談を受け付け、面談する。時間をかけて社会復帰をサポートする。

同窓口は、他の機関と協力して解決にあたるのが特徴だ。相談があると、それぞれの担当者を集めて会議を開き、窓口は問題解決の中心として役割を果たす。公的援助の制度を紹介したり、ハローワークに相談員が同伴したりするなど、時間をかけて自立に向けた支援をする。

ひきこもりの若者が抱える問題は複雑だ。うつ病などで治療が必要な場合や、家庭の貧困や、発達障害、職業技能の不足などが要因の場合もある。これまでは保健所、少年センター、地域若者サポートステーションなどが相談を受けてきたが、単独では解決できない場合も多かった。

昨年七月の市の調査では、民生委員などが把握しているひきこもりの人は市内に二百三十五人。若者が多いと思われがちだが、年代別では団塊ジュニア世代の四十代が最多で六十三人。十～二十代でひきこもりになり、原因が改善されないまま時間がたってしまう場合が多いという。

相談員の八田友矢さんは「自立までに何年もかかることもある。まず本人の苦しみを受けとめて、『じゃあ、どうしようか』と一緒に考えていきたい」と話している。

こうした窓口の設置は、自治体の努力義務として法律が定めている。県内では彦根、米原、高島市にあり、四月には県立精神保健福祉センター(草津市笠山)にも新設。計五カ所に拡大している。(野瀬井寛)

兵庫県立こども病院 障害者不妊手術称賛? 団体など抗議文

毎日新聞 2017年10月31日

兵庫県立こども病院(神戸市)が昨年発行した「病院移転記念誌」に、かつて実施されていた精神障害者や知的障害者への強制不妊手術を称賛するような記述があったことが分かった。全国40以上の障害者団体や市民グループが1日、病院や県に抗議文を提出する。

問題の記述は小川恭一名誉院長の寄稿で、1970年の病院設立当初を振り返った部分。当時の金井元彦知事が「子供に障害が起こってしまったからでは遅すぎる」との信念から、「本邦では初めてのユニークな県民運動となった『不幸な子供の生まれない施策』を展開されました」と書かれている。

「不幸な子どもの生まれない運動」は66年に兵庫県が開始。障害児や遺伝性疾患を持つ子を「不幸な状態を背負った児」と位置づけ、精神障害者や知的障害者への強制不妊手術費用を県が負担して「出生予防」を進めた。運動は全国に広まったが、障害者団体が激しく抗議し、74年に県は対策室を廃止した。

抗議文では、障害者差別解消法が施行された現在なお、この「運動」を肯定的に取り上

げていることを問題視。病院側に削除・訂正を求める。呼びかけ人の一人で脳性小児まひの古井正代さん（64）は「かつての抗議活動は何だったのか」と憤る。

抗議文に名を連ねた立岩真也・立命館大大学院教授（社会学）は「この『生まれない運動』の中心は医療でもなんでもなく、障害児の選択的中絶を進めようという運動だった。当該の文章はそのことにまったく触れていない」と批判したうえで、「鈍感と無知を知らせるためにも記念誌はそのままに、説明と釈明を加えることを望む」という。

県立こども病院総務課は取材に「病院設立の背景を説明したものと理解している。もらった原稿を掲載しただけで内容を評価する立場にない」と説明している。【上東麻子】

介護施設で入所女性死亡 名古屋市

産経新聞 2017年10月31日

31日午前8時半ごろ、名古屋市守山区上志段味東谷にある介護施設「すこやか」で、入所者の無職、川津信子さん（92）が自室のベッドで意識不明になっているのを、巡回した女性看護師が発見した。川津さんは病院に運ばれたが、同日午後0時15分ごろ、死亡した。

守山署によると、同施設は重度対応型の高齢者、障害者向け賃貸住宅。大きな外傷や争った形跡はないが、11月1日に遺体を司法解剖して詳しい死因を調べる。

畑田和男氏が死去 「太陽の家」前理事長

日本経済新聞 2017年10月31日

畑田 和男氏（はただ・かずお＝社会福祉法人「太陽の家」前理事長）29日、間質性肺炎のため死去、82歳。自宅は大分市高崎3の6の3。告別式は11月1日午後1時から大分市住吉町1の3の45の葬会館住吉斎場。喪主は妻、弘子さん。

1965年の「太陽の家」（大分県別府市）の創設に携わったほか、大分国際車いすマラソンの発足にも関わり、障害者スポーツの普及に取り組んだ。

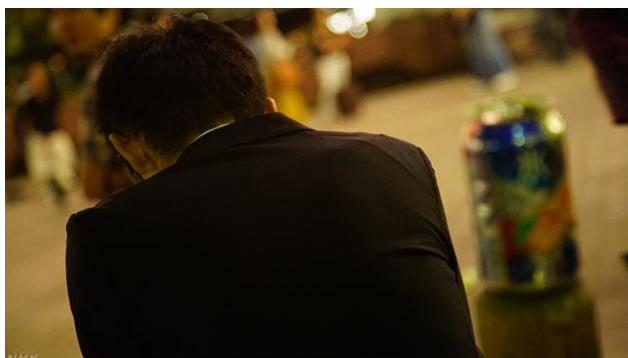
“フラリーマン” あなたは夫を許せますか？

NHKニュース 2017年10月31日



いま、働き方改革が広がる中で、仕事が早く終わってもまっすぐ家に帰らない人たちが増えているといいます。人呼んで“フラリーマン”。書店や、家電量販店、ゲームセンター…。「自分の時間が欲しい」「仕事のストレスを解消したい」それぞれの思いを抱えながら、夜の街をふらふらと漂う男性たち。NHKでは9月、この“フラリーマン”の姿を「おはよう日本」

で放送し、このWEB特集でも記事を掲載しました。ネット上には、多くの書き込みがあり、新聞や民放でも特集が組まれるなど、大きな反響を呼びました。ネットの書き込みをよく見ると、目につくのは、女性からの“怒りの声”。そこで今回、われわれ取材班は、徹底的に女性の意見を聞いてみることにしました。（映像取材部カメラマン 富野要太 社会番組部ディレクター 石



川祥次郎)

“フラリーマン”は男性目線

正直に言います。“フラリーマン”取材班のスタッフは、ディレクター、カメラマン、音声、編集など関わる人すべてが男性でした。しかも皆、いわゆる子育て世代。休日は、自分の時間より家庭を優先し、育児にも積極的に関わっているつもりのパパたちです。そんな私たちは、“フラリーマン”という存在にある種の共感を覚え、男性たちの本音を伝えたいと前回のレポートを制作しました。

憤る子育て中のママ

しかし、多くの女性の厳しい声に、“このままでは終われない”と女性の本音を聞きに、再び街に出ることにしました。



休日の銀座は、子どもを連れた家族連れで大にぎわい。意を決して女性たちに話を聞いてみると、いきなり「フラリーマンなんてけしからん！」との声。特に憤っていたのは、小さな子どもを持つお母さんたちでした。

子育て中の主婦に“フラリ”する自由はない！

話を聞く中で、赤ちゃんをだっこしながら、幼児の手を引いて歩く女性に出会いました。0歳と3歳の子どもを育てるこの30代の女性は、テレビで“フラリーマン”を見て、「そんな人がいるのか」と憤りを感じたと言います。

「こっちは自分の時間もなく育児しているので、小さな子どもがいるなら帰ってきてほしい」

さらに、世の“フラリーマン”たちに、子育て中の主婦がいかに大変か、知ってほしいとのこと。ということで、早速、その様子取材させていただきました。

自宅へお邪魔した取材班。家事や育児の妨げにならないようにしながらじっくりと観察です。

女性は、IT企業で働いていますが、2か月前に出産。現在は育児休業中です。日中、3歳の長男は保育園へ預けていますが、まだ首も据わっていない赤ちゃんは、3時間おきの授乳が欠かせません。育児をしながらの家事です。世の男性が“フラリーマン”に変身する夕方から夜にかけての時間帯が特に大変なんだそうです。



午後5時。夕食の仕込みをしつつ、合間にお風呂場掃除。その後、洗濯物を取り込みに2階へと駆け上がります。

すると突然、赤ちゃんの鳴き声。手早くおむつを替えると、あっという間に午後6時。長男の保育園のお迎えの時間です。抱っこひもで赤ちゃんを抱え、徒歩10分。長男を引き取り、すぐに家事の待つ自宅へと戻りますが、長男は雨の中、屈託の

ない笑顔でわざわざ水たまりを歩きます。当然、靴はびしょぬれです。

午後7時、夕食の時間。この日のメニューは、魚のムニエルと肉じゃが、カボチャのスープ。デザートにリンゴも。栄養バランスをしっかりと考えられた食事ですが、長男はリンゴに夢中。なかなか思うようには食べてくれません。

夕食のあとはお遊びの時間です。電車のおもちゃを部屋いっぱい広げ、ご機嫌に遊び

始めました。しかし、そう思ったのもつかの間。突然おもちゃを投げ始めてしまいました。「投げちゃダメでしょ！」ここは、しっかり言い聞かせます。機嫌を直してかくれんぼをしようと柱に顔をつけたそのとき、「おしっこ！」。慌ててトイレへと駆け込みますが、時すでに遅し。部屋には、黄色い水たまりが。

そして午後8時。お風呂タイムです。子ども2人を1人で入れるのは至難の業。赤ちゃんを脱衣所で待たせ、手早く長男の体を洗い、一気に自分も済ませてから赤ちゃんをお風呂へ入れるんだそうです。

午後9時。なんとか子どもたちをパジャマに着替えさせたとき。ようやく、夫が帰ってきました。待ちに待った援軍の到着に、女性の笑顔がこぼれます。

赤ちゃんを夫に預け、長男を寝かしつけたのは、午後10時。すべてが終わって、ほっと一息したところで質問してみました。

もしも夫が“フラリーマン”をしていたら？ 女性は鋭い視線でこう答えました。

「仕事だったらしかたがないと思えるけど…ありえない」



女性にも賛否両論！

NHKが9月の放送後に行ったアンケートには計965件の、実にさまざまな意見が寄せられました。女性からの厳しい意見や、共感する声もありました。

30代女性「子どもが小さいうちは一刻も早く帰宅して欲しかったが、現在は、家にいられると逆にわずらわしい」

60代女性「早く帰宅されても対応に困る」

子どもの年齢、夫婦の世代によって捉え方が違うようです。

30代女性「いいと思うけど、家族を寂しがらせない程度にしたい」

50代女性「連絡してくれれば構わない。夕飯がむだになるのがイヤ」

では、“フラリーマン”をどう考えていけばいいのか。皆さんのアンケートを読んで気付いたことがあります。それは「家族」や「パートナー」といった言葉がたびたび登場するということです。

30代女性「パートナーには許可を取った方がいい」

50代女性「せっかく家族になったのだから、少しでも歩み寄った方がいい」

変身した“ヘビーフラリーマン”！



パートナーと話し合ったことで、変化があった“フラリーマン”もいます。物流会社に勤める長谷川毅さん。働き方改革で定時退社が増え、週に5日は寄り道をするという“ヘビーフラリーマン”。前回の放送にも登場して頂きました。

長谷川さんは、まっすぐ帰ると共働きの妻の家事の邪魔になると考え、残業だと言って、2時間近く寄り道をして

いました。公園で読書をしたり、カフェでコーヒーを飲んだり、バッティングセンターに行ったり。楽しそうにバットを振って「気分最高！これやっているとかがいちばん」と、さわやかに話していたのが印象的でした。

長谷川さんは、この取材を機に、自分が“フラリーマン”であることを妻の美妃さんに明かし、「あまり遅くならないなら」と許してもらっていました。

妻に告白、その後…

水曜日の午後6時30分。とある駅の改札口で待っていた私たちの前に再び現れた長谷川さん。この駅には、寄り道スポットのバッティングセンターがあります。しかし、この



日は別の方向へと歩き始めました。

その先で待っていたのは、妻の美妃さん。仲良く手をつないで閑静な住宅街の方向へ。たどり着いたのは、なんとピアノ教室！9月から週1回、一緒に通い始めたんだそうです。長谷川さんは以前、自身の結婚式で弾いてみせて、妻を驚かせようとピアノを習ったことがありました。妻の美妃さんも小さい頃にピアノを弾いていたと聞き、一緒に行こうと誘ったんだそうです。

いま2人は、「連弾」に挑戦しています。2人ともまだ楽譜が読めないため、なかなか息が合いませんが、それでも、ずっと通い続けています。この日は、熱心な先生の愛ある指導をみっちり1時間。最後にはシューベルトの「鱒（ます）」を1曲弾き通すことができ、笑顔がこぼれていました。

“フラフラ”を有意義な時間へ

長谷川さん夫婦には、ピアノを始めである変化があったそうです。それは、ささいなことで起きていたけんかの数が、めっきり減ったこと。コミュニケーションを大切にすることで、夫婦関係にもよい影響があったようです。

「週に1回でも夫婦で同じことに集中するのは、とても有意義だと思う」と長谷川さん。それを聞いた妻の美妃さんも「楽しいです」と満面の笑みでした。

ピアノ教室の日は、2人で外食をしたり、スーパーで総菜を買って帰るなど、美妃さんの家事の負担も減らしているそうです。長谷川さん、実はまだフラフラするのを完全にはやめられないそうですが、肩を寄せ合ってピアノを弾く姿はととてもほほえましく感じました。

働き方改革の先 “フラリーマン”の行く末は

長谷川さん夫妻は子育て中ではありません。“子どもがいたら、ピアノ教室なんて無理！”という声もあるでしょう。しかし、子育てに奮闘する姿を取材させてもらった30代女性の家庭でも、習い事はしていないものの、夫婦で話し合い、子どもを寝かし



つけたあとに、それぞれ自由な時間を作るようにしているそうです。

“フラリーマン”に対しては、それぞれの立場で意見もさまざまですが、いずれにしても、夫婦、家族で話をすることが最も大切なのだと感じました。

ちなみに取材したカメラマン。実は最近、第3子が誕生、今度こそ“フラリーマン”卒業を家族に誓いました。

働き方改革によって生み出された時間。その時間を“どう有意義に使うか”を考えることは、そのまま、“人生をどう豊かに生きるか”を考えることだと思います。

働き方改革のその先にあるいわば、“人生の未来図”をしっかりと見据えなければならぬのかもしれませんが。皆さんも、そして、子育て中の私たちも。

障害、低体重…どんな子にも 新たな母子手帳、誕生 斉藤純江

朝日新聞 2017年11月1日

「ケアラーズノート」を手にする荻野志保さん（右）と、「すぎなみ重度心身障害児親子の会 みかめぐみ」の親子＝東京都杉並区



妊娠中の母親や出産後の子どもの健康管理などに活用される母子健康手帳。ただ、障害があつて発育がゆっくりな子や低体重



で生まれた子の親にとっては、使えなかったり、使うのがつらかったりする場合もあります。そんな親子に寄り添った、当事者の手による独自の「母子手帳」が生まれています。

人工呼吸器は必要か。食事は口から取れるか、管から胃腸に栄養を入れるのか……。

重度心身障害児や、医療的ケアが必要な子の親子のための手帳「小児版介護者手帳 ケアラーズノート」には、子どもの体の状態や、必要なケアに関する情報を書き込めるページが多い。今年6月、「すぎなみ重度心身障害児親子の会 みかめぐみ」（東京都杉並区）と、家族介護者支援などに取り組むNPO法人UPTREE（同小金井市）が共同で制作した。

行政の母子手帳には、「自分でコップを持って水を飲めますか」など、月齢や年齢に応じた発達の見安となる項目があり、「はい」「いいえ」などで答える。94%の子が当てはまる身長と体重の範囲を示した「発育曲線」も掲載。だが、障害があつたり、小さく生まれたりして「目安」に当てはまらない子の親にとっては、使いにくく、見るのもつらい場合がある。

みかめぐみ副代表の荻野志保さん（41）には、胃ろうによる栄養の注入や、たんの吸引などのケアが必要な小学1年の長女（6）がいる。母子手帳の発達に関する項目は長女には全く当てはまらず、病歴の記入欄は足りなかった。そこで、UPTREEが発行する大人向け「介護者手帳」を参考に、子育てと介護の要素を取り入れた小児版の介護者手帳を作った。



月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行